



大地震・大津波に備える 「むらの覚悟委員会」の取組



大分県佐伯市米水津 宮野浦むらの覚悟委員会
委員長 宮脇 茂俊

1 地区の特徴

私たちが住む佐伯市米水津（よのうづ）の宮野浦地区は、大分県の南部に位置し、漁場豊かな豊後水道に面しています。リアス式海岸特有の複雑な海岸線を形成しており、昔から網で獲る漁業が盛んで、その新鮮な魚を原料とした水産加工業が有名な地域でもあり、その生産量は全国トップクラスを誇っています。



太平洋に面する佐伯市米水津地区

宮野浦地区は、その水産加工業の施設が集中している地域で、住民400人に対し、従業員も同じく400人近くが勤務しており、その多くは地域外からの労働者が占めています。そのため、地震・津波に対する防災対策は、地元の住民だけでなく、土地勘のない施設の従業員にも急售とされていました。

2 むらの覚悟委員会の設立背景

東日本大震災が発生した時、テレビから放送されたその凄まじい映像には、誰もが衝撃を受けたことと思います。甚大な津波被害が出た東北地方の漁港と、地形が酷似している私たちの地域にとっては、本当に

身近なものに感じました。

「今のうちに何か対策をしておかなければ、宮野浦地区とこの産業そのものが消滅してしまう」という共通の思いが、地区役員と水産加工業の経営者とで一致し、今後予想される南海トラフ大地震に備え、みんなで生き延びようと東日本大震災後の約半年後、平成23年10月に「むらの覚悟委員会」を設立しました。

3 組織の概要

(委員数) 約20人

(委員の職種) 地区役員、水産加工組合、消防団、老人会、各種漁業団体、建設業、民生委員、女性役員など

4 これまでの主な活動

これまでの主な活動を紹介します。

- ・定期的な防災委員会の開催
(毎月第1木曜日)
- ・地区内における危険箇所の検証
- ・避難路の整備及び定期的な清掃活動
- ・災害時の「決めごと」を冊子にした「むらの覚悟」を発刊
(初版を見直して「第2版」まで発刊済み)



冊子「むらの覚悟」第2版の発刊

- ・「輸出用コンテナ」を改造した防災備蓄倉庫の設置。
 - ・備蓄品準備委員会による備蓄品の方向性、内容の検討及びその調達(住民参加型の「持ち寄り方式」による備蓄品の収集活動)
 - ・高齢者が避難しやすいための「ノルディックウォーキング講習会」の実施
 - ・地区外の企業との連携活動
 - ・NPO法人、大学との協働による防災意識向上活動
- ①住民に対する「見える化」(GPS測量による津波浸水区域の3Dマップ作成など)
 - ②独自の避難訓練(要援護者搬送訓練、避難車両渋滞計測実験など)
- ・地域外の訪問者でも避難所が一目でわかる「のぼり旗」の製作
 - ・避難所を活用した「避難所体験学習」の実施

5 活動の特色など

その他に私たちが活動するうえでの特色を紹介します。

会議開催時の工夫

会議時間を最長でも90分とし、委員全員の意識を1つに集中させて議論するようにしています。また、「見える化」の手法で常時プロジェクターを使用して、円滑な会議の進行に努めています。

活動の経費

会議で決めた事項を「絵に描いた餅」に終わらせないために、地区費からの支出だけでなく国や県の補助事業を活用しています。また、費用がかからない方法も検討し、人の手による作業を重視して、老人会の委員から先人の知恵を出してもらうなど、工夫を凝らした活動を展開しています。

防災意識の醸成

建設した避難所が、地域の防災意識のシンボルとなっただけでなく、地区住民の「心のよりどころ」として位置づけられています。避難訓練

の参加率もよくなり、備蓄品収集時には多くの提供品が寄せられ、防災活動に対する一体感が地域内で醸成されています。

防災学習の展開

将来を担う子供たちの「防災力」を養うため、避難所を活用した防災学習に力を入れています。今後も、児童・生徒を対象に「生涯学習フィールド」として、防災学習を継続していきます。

6 防災まちづくり大賞受賞

このような活動が評価され、平成27年2月に「第19回防災まちづくり大賞」で、総務大臣賞を受賞しました。

7 今後の展望

最後に、大切に思っていることは以下の3つです。

1. 地震・津波の怖さを忘れないこと
2. 地域の歩幅(人材や財政力)で一歩ずつ前進すること
3. 継続すること

活動を始めて、約4年が経過しました。牛歩の歩みですが、私たちが何らかの行動を起こすことが、地域の人々の命を守り地震・津波への防災意識の向上につながると考えています。これからも、次世代を担う子ども達のためにも、一步一步、精進を重ねて頑張っていきたいと考えています。



防災学習：避難所宿泊体験の様子